別紙犯罪後瘋癲ニ罹リタル者処分方ニ付請訓ノ趣ハ其痊癒ヲ俟テ審理スベシ原告官ニ還付スルニ及ハス

酒田始審裁判所撿事　十五年五月廿九日伺　全年六月十三日付

第一条　治罪法第二百六十八条ニ被告人疾病ニ因リ出廷スルヿ能ハサルトキハ痊癒ニ至ル迄辯論ヲ停止シ若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付既ニ辯論ヲ終リタルトキハ其痊癒ノ後裁判言渡ヲ為スヘキ旨掲載有之候処法律ハ精神ノ不具ナル者ハ之ヲ恕スルモ身体ノ不具ナル者ハ之ニ借サヽルノ原則ニシテ豫審ニ在テハ之ヲ訊問シテ終結スルノ道アリト雖公判ニ於テハ自由ニ弁護ヲ為サシム可キノ主意ナルヲ以テ別ニ之ヲ処スルノ仮令月ヲ重子年ヲ閲ルモ必ス其痊癒ヲ俟

ツヘキモノニ候哉

右ハ左案ノ通

指令

第一条　伺ノ通

第二条　若シ其病不治ノ症ニ陥リ痊癒ノ期ナキニ至リタル時ハ之ヲ如何處分スヘキモノニ候哉

右ハ左案ノ通

指令

第二条　治罪法第二百六十八条ニ依ルノ外他ニ処分方ナキニ付其侭差置クベシ

酒田始審裁判所撿事

十五年五月廿九日伺
仝　年　六月十三日内訓

犯罪ノ後知覚精神ヲ喪失シタルモノ回復セサルノ証アル者ハ其知覚精神ヲ具ヘタル時ノ事為ハ悉皆之ヲ忘失シテ究カモ未生以前ノ事ノ如ク又今之ニ刑ヲ加フルモ其憂苦ヲ感セス到底効ナキ者ニシテ其罪ヲ論セサル者ノ如ク存シ候得共法律ニ正條無之右ハ如何處分スヘキモノニ候哉

相伺候也

右ハ左ノ通

内訓

治罪法第二百六十八條ノ通リ心得ベシ

第二百六十九條　禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡昏又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ証アルニ非サレハ闕席裁判ヲ為ス可カラス

豫審終結ノ言渡昏又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スル能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ

被告人出廷セサル時ハ
欠席裁判ヲ為スヲ可キノ
告知書ヲ親属若クハ戸
長ニ送達スヲ可シ

栃木始審裁判所撿事

十五年五月十日 請訓
仝年仝月十九日 内訓

客年十二月以前審理ニ著手セシ事件ニシテ被告人逃亡シ而ノ其罪証十分ナル者ノ如キハ闕席裁判ヲ求メ得ベキ哉

右ハ先例ニ因リ左案ノ通

内訓

請訓ノ趣ハ其見込ノ通但治罪法中闕席裁判ニ関スル條款ニ準據スベシ

山形始審裁判所判事

十五年三月廿日請訓
仝年仝月廿二日内訓

治罪法第二百六拾九條其末項ニ豫
審終結ノ言渡書又ハ呼出状ヲ本人
ニ送達スルヿ能ハサル場合ニ於テハ裁
判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限
内ニ被告人出廷セサルトキハ闕席裁判
ヲ為スヿ可キノ告知書ヲ親属若シクハ
戸長ニ送達スヿ可シトアリ其告知書
ノ如キハ裁判長ノ氏名ヲ以テ発スヿ可
キモノト思考セラレ候得共若シクハ
書記局ヨリ発スヿ可キモノニモ有之哉
明文無之ニ付此段御内訓ヲ奉仰

候以上

右ハ左ノ通

内訓

請訓ノ趣通常言渡書ト均シク係リ裁判官書記署名捺印シ之ヲ送達ス可シ右及内訓候也

秋田始審裁判所検事

十五年一月廿五日請訓
仝年三月廿四日内訓

第十条 欠席裁判ニ付テハ法律ニ散見候得共被告人犯罪ノ後直ニ逃走シ一應ノ尋問ヲナス克ハサル場合ニ於テ豫審判事（事件送付ノ末終結ノ言渡アリテ管轄裁判所ニ交付セサルヲ得サルトキハ被告人ニ對シ証憑具備スル上ハ欠席ノ裁判ヲナスヲ得（キ哉

右ハ左ノ通

内訓

第十條 豫審判事ニ於テ重罪裁

判所又ハ軽罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ
ナシ其事件禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ
場合ニ於テ被告人逃亡シテ所在不
分明ナル時ハ治罪法第二百六十九條
ニ記載シタル手続ヲ尽シタル上ニ非レ
ハ闕席裁判ヲナスヘカラス
但罰金ノ刑ニ該ルヘキ時ハ直ニ闕
席裁判ヲナスヿヲ得

松本軽罪裁判所判事

十五年三月八日請訓
仝年仝月廿日内訓

闕席裁判ヲナス場合ニ於テ右事件
ニ付民事原告人其他訴訟関係人
等ノアル時ハ公庭ヲ開キ審理ヲナシ
而シテ其申立ヲナスハ當然ニ候得トモ
其訴訟関係人無之時ト雖モ公廷ニ臨
ミ検事ノ陳述刑ノ適用等ヲ聞キ被
告人出庭シアルモノト見做シ其裁判
申渡ヲナス可キ欤其裁判ノ原則ヲ
言ハ公庭ニ臨ミ之ヲ公行スルハ素ヨリ
然ル可キナラン然レモ其原則タル倍審
等アルニ依テ被告人闕席スルモ公庭

ヲ関カサルヲ得ス今被告人欠席シ他
ニ訴訟関係人之レナキ事件ニ於テハ
法庭ヲ開クモ検事ト相對シ同官ノ
被告事件ノ陳述刑ノ適用ヲ開クニ止
ル然レモ右法式ヲ履行セサルヲ得サ
ル手治罪中ニモ右等ノ場合ニ於ル其
手続明記無ニ付仰内訓候也

右ハ左ノ通

内訓

欠席裁判ノ場合公廷ヲ開ク儀ニ付別
紙請訓ノ趣ハ見解ノ通

仙臺軽罪裁判所検事補

十五年三月三十日質問
同年四月五日回答

爰ニ現行犯罪者現場ヨリ逃走ヲナ
シ其郷貫氏名人相モ又ハ郷貫不分明ナレモ氏名人相ハ
判然タルヲ以テ豫審判事ニ於テ取調
ニ着手令状ヲ相発シ捜査ヲ盡スモ
其在所更ニ相分ラス雖然其事犯
於テ証蹟了然タルヲ以テ被害者ハ
勿論証人ト思料スヘキモノ等取調豫
審終結ニ及ヒ其言渡書ハ固ヨリ送
達スルヿ能ハサルトハ雖モ証據充分ナ
ルニヨリ公判ヲ求メ欠席裁判ヲナス
ヘキモノナル哉然ルニ治罪法第二百六

十九條禁錮以上ノ刑ニ該ル（キ被告人公判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタル証アルニ非サレハ欠席裁判ヲナス可カラストアル條ヲ通読スルトキハ被告人ニ對シ一訊モ致サス外関係人ノミ取調タル前條ノ如キ場合ニ於テハ到底公判ヲ求ムルノ理由之レナキ様又同條第二項及ヒ第三百五十六條ヲ観ルトキハ一訊セサル被告人モ欠席裁判ヲスルノ効アルヤニ被考ヲ以テ質

右ハ左ノ通

回答

第二項　被告人ニ對シ現ニ訊問ヲ為サヽルモ氏名并ニ犯罪事件明瞭ナル ニ於テハ相当ノ手続ニ從ヒ欠席裁判ヲナスヿヲ得可キ者トス

爰ニ非現行犯起訴ヲナシ豫審ヲ需求ニ及ヒタリ其被告人ニ令狀相発シタル処逃走ニ及ヒ尚捜査ヲ盡スモ更ニ所在不相分迚去欠席裁判ヲ要スルノ証蹟之レナリ到底豫審ヲ停止スルノ外ナシ之ノ場合ニ於テハ豫審掛リハ関係ヲ免カレ其一件書類ニ意見ヲ附シ検事ニ還付シ検事

ニ於テ最早捜査ノ道絶ヘタルヲ以テ其事件ハ自然消滅致シ書類ハ訴局ニ保存致シ置クヘキ或又ハ書記局ニ於テ保存致サセ置キ可然哉

右ハ左ノ通

回答

第三項 非現行犯ニ係ルト雖前項ノ處分ヲナスヿヲ得若シ被告人ノ氏名等不分明ナル時ノ如キハ豫審ヲ中止シ其書類ハ書記局ニ於テ保存スヘキ者トス

大坂府 十五年三月十三日付 令年四月八日付

第四條 治罪法第二百六十九条末項ノ場合ニ於テ告知書ノ送達ヲ受ケタルヰ戸長ハ告知書ヲ謄寫シ被告人又ハ其親屬故旧ニ知ラシムル為メ被告人住所ノ門戸ニ貼付スル事ノ処分為致可然哉

右ハ左案ノ通

指令

第四條 告知書送達ノ儀ハ戸長ニ於テ便宜取計フモ苦シカラス

名古屋軽罪裁判所判事

十五年三月廿五日請訓
仝年四月七日内訓

明治十四年十二月三十一日以前審理ニ着手セシ刑事ノ被告人ニシテ責付保釋又ハ拘留中逃走シ所在ノ知レサル者アルトキハ治罪法中闕席裁判ニ関スル條ヲ適用シ闕席裁判ヲナシ然ル可キ乎

果シテ闕席裁判ヲナスヲ得ハ其被告人ハ治罪法ニ従ヒ故障ヲ為スヲヲ得セシメ可然乎

右審案スルニ客年中審理ニ着手シタル者ハ第八十二号公布ニ依リ

一般下ゲテ記ムベシ

旧法ニ從フ可キ者ナルモ旧法ニ欠
席裁判ヲナス可カラサルノ旨條ナキ
ニ依リ治罪法ニ準シ闕席裁判ヲ
ナサシムルハ妨ケナキノミナラス実際毫
モ弊害ヲ生スルヿナク大ニ便益アル儀
ト考量候就テハ之レニ對スル故障
モ差許シ然ル可シ因テ左ノ通

内訓

欠席裁判ノ儀ニ付請訓ノ趣ハ總テ
解見ノ通

宮城上等裁判所檢事

十四年十月廿九日伺
十五年五月九日付

第三十六條　治罪法第二百六十九條第
二項猶豫ノ期限ヲ定メ云々ト之レアル
所其期限ニハ制限ナキヤ
又闕席裁判ヲ為スヘキノ告知書ヲ親
属若クハ戸長ニ送達スベシト其戸長
ハ被告人所在ノ地ノ戸長ナル哉將タ被
告人本籍ノ戸長ナリ哉

右ハ左ノ通

指令

第三十六條　猶豫ノ期限ニ制限ナシ又
告知書ヲ送達スルハ相当ト思料スル戸

長トス

（理由）本指令ノ通

岡崎始審裁判所判事

十五年四月十日　請訓
左年左月廿四日　内訓

第一條　檢事ヨリ豫審ヲ求メタル被告事件（禁錮以上ノ刑ニ該ルモノ）アランニ其事ハ他ノ證憑ニ依リ明白ナルモ被告ハ逃亡シ且ツ何國何郡村出生通称某及ヒ人相云々トノミニシテ其國郡村原籍ナク住所氏名判然セザルモノハ其人ハ果シテ通稱某カ所為ナルヤ否ヲ知ルニ由ナキモノトシ一面ハ豫審ヲ停止シ一面ハ治罪法第百三十五條ニヨリ控訴裁判所檢事長ヘ人相書ヲ出スモノナルヤ又ハ其事明白ナル上ハ其人原籍氏名不分明ナルニ関セス同第二百三

十一條ニヨリ豫審終結ノ言渡ヲナスモノ
ナルヤ
但若シ言渡ヲナスモノナラハ其言渡書
ヲ親屬ニ送ラン耶親屬ナク戸長ニ達セ
ン耶管轄戸長ナク到底糞スルヲ得ザル
ニヨリ之ヲ訴訟書類ニ綴付シ而ノ公
判ニ付シ公判ニ於テ停止スルモノナ
ルヤ
右ハ左ノ通
内訓
第一條　前段見込ノ通
第二條　若シ又被告ノ生所姓名モ判然
シ其被告事件明確ナルモ被告ハ公判呼
出ニ應セス逃亡シ豫審終結ノ言渡又ハ呼
出狀ヲ本人ニ送達シタル証ナク治罪法
第二百六十九條第二項ニヨリ親屬若ク
ハ戸長ヘ告知書ヲ送達シタルニ其告書
ノ猶豫期限前親屬戸長ノ内ヨリ被告
カ逃亡ニ付通知スル能ハザル旨届出
テ之ヲ告知スルヲ得サル場合モ被告
ガ知ルト否トニ関セス闕席裁判ヲナス
ヲ得ルヤ又ハ公判ヲ止メルモノナルヤ
右ハ左ノ通
内訓
第二條　治罪法第二百六十九條ノ手
續ヲナシタル上ハ闕席裁判ヲ為スベシ

於八戸治安裁判所弘前裁判所掖事代理警部　輕罪

十五年四月八日　諸訓
仝年仝月廿五日　内訓

第一條　違警罪以上告訴告發ニヨリ其証憑充分ナル者ハ闕席裁判ニ付スル義ハ勿論ニ候得共當時其犯者ノ住所分明ナラサル者ハ犯罪ノ地ヲ最終ノ住所ト看做ニ治罪法第二百六十九條ノ手續ニ可及乎

右ハ左案ノ通

内訓

第一條犯罪ノ地ヲ最終ノ住所ト看做ヲ得ス但違警罪ニ付テ人民ノ告發ハ受理セザル者トス

第二百七十條　闕席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルヿヲ許サス但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷スルヿ能ハサルノ事由ヲ證明スルヿヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルヿヲ得

山形始審裁判所撿事　十五年五月十七日請訓　左年六月二日内訓

第三條　罰金ニ當ル犯罪者住所氏名ヲ詐称シタルニ由リ其所在ヲ知ル能ハス如此ハ容貌体格ノミヲ以テ欠席裁判ヲ言渡シ當裁判所ノ門前ニ其言渡文ヲ掲示シタルノミニテ可然哉

第四條　前條ノ刑ヲ執行スルニ罰金ヲ納完セサレハ禁錮又ハ拘留ニ換フヘキ者ナルヲ以テ本年丙第六号庁達ニ從ヒ逮捕状ヲ發シ可然哉

右審案候處第三條第四條ハ容貌体格ノミ知レ居ル者モ氏名及ヒ所在ノ知レサル者ハ裁判言渡ヲナスヘカラサル

司法省

儀ト考量候ニ付左ノ通

内訓

第三條第四條　氏名及ヒ所在ノ知レサルモノハ欠席裁判ヲナス可ラサル儀ト心得ヘシ

松江軽罪裁判所撿事　十五年四月七日伺　全　年五月廿七日付

第三條　明治十四年丙第二十号布達既決囚ト八闕席裁判ニ係ル被告人モ包括スルカ

右ハ左案ノ通

指令

第三條　伺ノ通

七尾始審裁判所判事 十五年五月十一日請訓
全 年 全月廿四日内訓

第一條　收監状ヲ附シタル被告人公判ニ係リ辨論中被告疾病ニ罹ルヲ以テ辨論ヲ停止シ疾癒ヲ待ツノ間被告監倉ヲ破壞逃走シ未タ捕ニ就カサル者アリ該被告人ハ闕席裁判ヲナシ可然哉

右ハ左案ノ通

内訓

第一條　見込ノ通

第二百七十一條　被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ為スヲ可シ

第二百七十二條　裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ為メ相当ノ處置ヲ為スヲ可シ

稱讃誹謗其他弁論ヲ方礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルヿヲ得

十四年大政官第八十六号

達

治罪法実施ニ付テハ大審院其他各裁判所公廷取締ノ便用ニ供スルタメ其

院長所長ノ照会ニ応シ一名又ハ数名ノ巡査或ハ押丁ヲシテ守卒トシテノ公廷ニ入リ看護セシムヘシ

福嶋裁判所米澤支廳検事十四年十二月廿二日伺十五年二月十六日付

第二百七十三條　公廷ニ於テ軽罪遠警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ検察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ為シ又ハ次ノ公判ニ付スル

第七條　沼罪法第七十三條公廷ニ於テ軽罪遠警罪ヲ犯シタル時ハ其身分如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押云々ト有之処右取押ト八罰金科料ノ刑ニ該ルヘキ者ト雖氏余令昏ニ依リ之ヲ拘留スル儀ニ可有之哉

指令

第七条　罰金拘留科料ノ刑ニ該ル可キ者ハ拘留スルヿヲ得ス但第七十三条トアルハ二百七十三条ノ誤ニ為ナラン

ノ言渡ヲ為ス可シ

昏記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調昏ヲ作ル可シ

福島裁判所米澤支廳検事　十四年十二月廿二日付　十五年二月十六日付

第七条　治罪法第七十三条公廷内ニ於テ軽罪違警罪ヲ犯シタル時ハ其身分如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押云々ト有之処右取押トハ罰金科料ノ刑ニ該ルヽ者ト雖モ命令書ニ依リ之ヲ勾留スル義ニ可有之哉

指令

第七条　罰金勾留科料ノ刑ニ該ル可キ者ハ勾留スルヿヲ得スヽ但七十三条トアルハ二百七十三条ノ誤写ナラン

宇和島始審裁判所検事 十五年一月廿四日付 仝年二月十五日付

第七条 治罪法第二百七十三条ノ場合検察官ノ意見ヲ聴キトアルハ直ニ裁判ヲ為シ又ハ次ノ公判ニ付スルニ付意見ヲ述フル迄ト解釈シ可然哉

果シテ然ラハ本案ノ裁判言渡ヲナスニ二罪俱発トナスハ勿論ナリト雖モ同法第二百七十六条ニ拠レハ裁判所ハ訴ヲ受ケサル事件公廷内ノ犯罪ハ直ニ裁判スルヿヲ定メタリ此場合ニハ検察官訴ヲ起シタル原告ニ非サレハ法律適用ノ意見ヲ述フルハ本按事件ニ限リ二罪俱発ニ拠テ処断スルハ裁判官ニ任スル義ト心得可

然哉

右ハ左ノ通

指令

第七条　前項ハ伺ノ通後項ハ公廷内ノ犯罪ニ係ルモ法律適用ノ意見ヲ述フル等審判ノ手続ハ総テ通常ノ通心得（シ）（理由）公廷内ノ犯罪ト一般ノ犯罪ト異ナルハ只其訴ヲ受ケテ裁判ヲ為スヲ得ルト否ノミニシテ其他ハ異ナルヲナカル（シ）

千葉縣　十四年十月八日伺出　同年同月廿一日付ス

違警罪ノ審判ヲ関スル手続便宜取計フノ儀ニ付伺中

一治罪法第二百七十四條ニ依レハ公廷内ノ犯罪ハ違警罪裁判所ニ於テ軽罪ニ付始審ノ裁判ヲ審ノ裁判ヲ為シ得ヘキ筈ナレ𪜈右ハ警察署ニテハ不相成筋ニ候哉

第五項　治罪法第二百七十四条ニ於テハ公廷内ノ犯罪ハ違警罪裁判所ニテハ軽罪ニ付始審ノ裁判ヲ為スヲ許スヲ是レ実ニ非常ノ変則ナリ而シテ法律ニ従ヒ構成シ正式ニ従ヒ審判ヲ為スヲ可キ違警罪裁判所ニ付テノミ此変則ヲ

第二百七十四条　前条ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ為シ軽罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ為ス可シ

軽罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ軽罪ニ付終審ノ裁判ヲ為ス可シ

用ユ可キ実際ノ便宜ノミヲ目的トシ特ニ裁判権ノ一分ヲ委任シタル警察署ニハ之ヲ適施スヲ可カラス依テ左ノ通指令

伺ノ趣第五項ハ伺ノ通

静岡縣 十四年十一月廿一日伺 同年十二月八日付

第四條 治罪法第二百七十四条ノ公廷内ニ於テ軽罪ヲ犯シタル時軽罪ノ始審ヲ為ス時ハ總テ軽罪裁判法ニ依リ裁判スヲ可キモノトス可有之哉又ハ違警罪ヲ裁判スル振合ニ依リ豫審ヲ求メス直ニ之ヲ裁判スルモ不苦哉

右審按スルニ第四条公廷内ニ於テ軽罪ヲ犯シタルトキ軽罪ノ始審ヲ為ス時ハ二百七十三條ニ依リ豫審ヲ求メス直チニ公判ニ付シ然ル可シ

第四條 後段問之通直ニ公判ニ付ス可シ

第五條 前条場合ニ於テ若シ軽罪ノ裁判ヲ為シタル時ハ之ニ附帯スル民事ノ私訴モ併セテ裁判スヲ可キモノニ可有之哉

右審按スルニ第五條 公廷内ニ於

テ軽罪ヲ犯シ其裁判ニ附帯
ノ私訴ト雖モ第四条ニ依リ併テ裁
判スヘキ者トス

指令

第五條 伺之通

島根縣 十四年十一月廿九日伺 仝年十二月四日付

第二條 警察署又ハ分署ニ於テ違警
罪ノ裁判ヲナスニ當リ其公廷ニ於テ軽罪
ヲ犯ス者アルモ治罪法第二百七十四條ニ
照準スルノ限リニ無之義ト相心得可
然哉

右審按候処是迄各所ニ御指令及ハ
レ候例ニ因リ左ノ通

指令

第二條 伺ノ通

島根縣　十四年十一月廿九日伺
　　仝年十二月十四日付

第二条　警察署又ハ分署ニ於テ違警罪ノ裁判ヲ為スニ當リ其公廷ニ於テ軽罪ヲ犯ス者アルモ治罪法第二百七十四条ニ照準スルノ限ニ無之儀ト相心得可然哉

右審按候処是迄各所ニ申指令及ハヽ候例ニ因リ左ノ通

指令

第二条　伺ノ通

司法省

高知裁判所判事 十四年九月十八日 同年同月廿一日 伺答 議

第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告第十八条本法第二百七十五条ノ場合ニシテ裁判所ニ於テ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ為シタルトキハ公判々事ヨリ直ニ豫審請求ノ為メ該事件ノ送致ヲ受ルモノナリ哉然ルトキハ此送致ヲ受ケタルヿヲ検事ヘ通知スルヿナク検事ノ起訴アリタル者ト同ク通常ノ規則ニ従ヒ豫審ニ着手致シ然ル可キ哉将タ検事ヨリ送致ヲ受ルモノナリ哉

人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作リ裁判所ニ於テ検察官ノ意見ヲ聴キ通常ノ規則ニ従ヒ裁判スル為メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ為ス可シ

回答

第十八条 治罪法第二百七十五條ニ定メタル規則ニ従ヒ豫審判事ニ送付スルノ言

渡ヲ為シタル上ハ検察官ニ於テ之カ執行ヲ為ス可キモノニ付豫審判事ニ於テ別段検察官ニ通知スルノ手續ヲ尽スニ及ハサル可シ

第二百七十六條　裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ為ス可カラス但辯論ニ因リ発見シタル附帯ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帯ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヿヲ得

松山軽罪裁判所検事

十五年二月十日請訓
仝年三月二十日内訓

第一条　治罪法第二百七十六条ノ法文ニ従ヘハ弁論ニ因リ発見シタル附帯ノ犯罪ハ其裁判所ニ於テ直ニ裁判ヲ為スモノヽ如シト雖モ若シ其事件重罪ナル時例ヘハ検察官軽罪裁判所ニ向テ窃盗ノ罪ヲ論訴シ公廷ニ於テ弁論中右窃盗ノ罪ヲ犯シタル際其家人ニ見咎メラレ罪ノ将ニ発露セントスルヲ慮リ其家人ヲ故殺シタルヿヲ発見シタル場合ノ如キハ軽罪裁判所ニ於テハ重罪ヲ審判スルノ権ナキニ付治罪法第二百七十五条ノ場合ト仝シク検察官ノ意見ヲ聴キ本案ノ弁論ヲ止メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ為スヿヲ義ニ候哉又其

既ニ受理シタル軽罪ノミハ先ツ裁判ヲ
為ス義ニ候哉

第二条 前条末段ノ場合ニ於テハ検
察官ハ其已ニ論訴シタル軽罪ノ公判
畢ルヲ俟テ其発見シタル附帯ノ重
罪ヲ捜査シ更ニ豫審判事ニ送致ス
(キヲ以テ前ニ言渡シタル軽罪ノ刑ハ
其執行ヲ為ス能ハサル而已ナラス果
シテ其附帯ノ事件重罪ニ係リ且ツ
証憑充分ナル件ハ刑法敷罪俱発
ノ法ニ照ラシ曩キニ言渡シタル刑ハ
其効ナキモノヽ如クニシテ而シテ被告
人ニ於テハ自然未決拘留ノ長キヲ受
ル不利益アルニ付若シ裁判所ニ於テ
其辨論ヲ止メサル時ハ検察官ヨリ請
求スル儀ト心得然ル(キヤ

第三条 軽罪裁判所ニ於テ辨論中
附帯ニアラサル重罪軽罪ヲ発見シタ
ル場合ニ於テ検察官ノ請求アル時ハ
其発見シタル重罪又ハ軽罪ノ事情
繁難ニ係ルモノト見込ムモノハ本案ノ
弁論ヲ止メ豫審判事(送)付スルノ言
渡ヲナシ其軽罪ニシテ豫審ヲ要セサル
ト見込ム者ハ刑法敷罪俱発ノ法ニ
従ヒ既ニ受理シタル事件ト併テ裁判
スヘキ義ニ候ヤ

司法省

第四条 前条重軽罪ヲ発見シタル場合ニ於テ検察官若シ其請求ヲナサヽル時ハ治罪法第九十六条ノ規則ニ従ヒ其裁判所ノ検事ニ告発シ其既ニ受理シタル軽罪事件ハ仝法第三百一条ノ精神ニ基キ相當ノ裁判言渡ヲナシ其告発ヲ受ケタル検事ハ治罪法第百七条ノ規則ニ従ヒ処分スル義ト心得可キ哉

右ハ左ノ通

内訓

第一條 第二条 第三條 第四條

辨論中他ノ犯罪ヲ発見シタル時ハ検察官ニ於テ其辨論中止ノ儀ヲ請求シ治罪法ニ従ヒ起訴ノ手続ヲナス可シ若シ検察官ニ於テ其請求ヲ為サヽル時ハ公判々事ハ之ヲ告発スルノミニシテ已ニ受理シタル本案ノ裁判ハ中止スルヿナシ 第三條 後段ノ場合ハ検察官ノ請求アル時ハ俄セテ裁判ヲナスヿヲ得

弘前始審裁判所検事

十五年三月九日請訓
同年同月廿一日内訓

第二條 治罪法第二百七十六條裁判所ニ於テ訴ヲ受ケサル事件ニ付裁判ヲナス（カラス但弁論ニヨリ発見シタル附帯ノ事件及ニ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニアラスト有之候處右附帯ノ事件トハ詐欺取財ヲナスニ付テノ証書ノ偽造変造度量衡ノ偽造ニ付テノ官印偽造ノ類ヲ云フ者ニシテ一人ノ窃盗被告事件辨論中其事件ニ付正犯従犯アルヿヲ発見シタル類ハ本条附帯ノ事件中ニハ無之

司法省

儀ニ候哉

右ハ左ノ通

内訓

第二条 既ニ公訴アリタル被告事件辨論中共犯人タル正犯從犯アルヿヲ発見シタル時ハ役令其被告人ハ異ナリト雖モ其事件ハ即同一ナルヲ以テ訴ヲ受ケサル事件ニハ非サルモノトス、

第二百七十七條 検察官被告人及ビ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ為スヿヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ為スヿヲ得

山形始審裁判所判事

十五年四月　請訓
仝年仝月二十日　内訓

治罪法第二百七十七條ニ曰ク「檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理スベカラザルノ申立ヲナスヿヲ得」又第二百七十八條ニ曰ク「裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ為スヿヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辨論ヲ停止」其第二百七十七條ハ前條即チ第二百七十六條ト連續シタル者ニテ該條ニアル辨論ニ因リ發見シタル附

帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ限リ檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可ラザルノ申立ヲナスヿヲ得ルノ意ナルヤ若シ之ヲ否ストシテ一般ニ通スル者トナサハ茲ニ豫審終結ノ確定（豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ノ期限ヲ經過シタル者ト豫審終結ニ對シ故障ヲ申立會議局ノ判決ヲ受ケ之ニ對シテ上告シタルモ其上告ノ立ヽスシテ重罪裁判所エ回サシテ重罪レタル者トヲ云フ）裁判所ヘ移サレ其公判ノ廷ヲ開キタルニ被告事件ハ輕罪ニシテ直チニ重罪裁判所ノ管轄ヲ受クヿ可キ者ニ非サルノ又ハ起訴ノ手續規則ニ背キタル者ナルヲ以テ公訴受理ス可カラサル者ナリノト申立ル者アラハ第二百七十八條末項ニ依リ本案即チ重罪裁判所ヘ移サレタル被告事件ノ辨論ヲ停止セサルヲ得サルカ然ラハ豫審終結ノ確定シタル者ハ消滅シタル者ト同一ナリ豈斯ノ如キ不當ノ理アランヤ然レヒ第二百七十七條ニ豫審終結セサル者ニ限ルトノ明文ナク是ヲ以テ之ヲ了解スル能ハス

右ハ第二百七十七條ハ二百七十六條ノ事件ニ限ラス總テ一般ノ事件ニ適用ス可キモノトス然レヒ大審院ノ判決ニ因受理シタル事件ハ必ス其判決ヲ遵守スベキヲ以テ管轄違又ハ公訴受理スベ

カラサルノ申立ヲ為スヿヲ得ス又重罪裁判所ニ移スノ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ為サスシテ其言渡確定シ其事件輕罪ナルトキハ其裁判所ニ於テ直ニ其裁判ヲナスベキモノニシテ管轄違ノ申立ヲ為スヿヲ得ス因テ左ノ通

内訓

治罪法第二百七十七條ノ儀ニ付請訓ノ趣ハ大審院ノ判決ニ因リ受理シタル事件ヲ除クノ外ハ総テ管轄違又ハ公訴受理スベカラサルノ申立ヲ為スヿヲ得但重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シ其事件輕罪ナルトキハ重罪裁判ニ於テ直ニ裁判スベキモノニシテ管轄違ノ申立ヲナスヿヲ得ス

第二百七十八條　裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ為スヿヲ得此場合ニ於テハ本案ノ弁論ヲ停止ス

高知裁判所長判事 十四年五月十八日 質議 同年七月 回答

第十二条 治罪法 第二百七十九条ニ検察官其他訴訟関係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アルトキハ云々重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ為スヿヲ得ト又第二百八十一條ニハ忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其裁判ハ第二百三十八条ヨリ第二百四十五条マテニ定メタル規則ニ從フヿトスレアリ然レハ則重罪裁判所ノ裁判官ニ對シ忌避ノ申立アリタルトキハ第二百三十八條以下ノ規則ニ從ヒ裁判スヘキハ論ヲ俟タスト雖モ其指名セラレタル裁判官自カラ之ヲ認可又ハ棄却スヘキカ若クハ重罪裁判所ノ裁判官ヲ得

第二百七十九條 検察官其他訴訟関係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ遠警罪裁判所軽罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ為スヿヲ得

豫審ヲ為シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ為シタル裁判其終審裁判ニ干預シタ

裁判所長之ヲ認可又ハ棄却スヘキカ

ル時亦同シ

四答

第十二条　公判ニ於テノ忌避ノ申立ハ第二百四十二百八十一条ニ第二百三十八条ヨリ第二百四十五条マテニ定メタル規則ニ従フトアリ而テ第二百三十八条ニ忌避ノ申立ハ豫審判事トシテ之ヲ為スヘキ旨ニ云々トアリ此豫審判事ト云ハ其事ニ付キ忌避スヘキ判事ノ指シタルモノナレハ公判ニ於テモ亦忌避スヘキ判事ニ申立テ該判事ニ於テ之ヲ認可シ又ハ棄却スヘキモノナリ

第十三條　前条ノ場合ニ於テ裁判長之ヲ判決スルカ又ハ其申立裁判長ニ係リ而シテ

第二百八十條　忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ為スヿヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ弁論ヲ停止ス

之ヲ棄却シタルトキ其申立人ヨリ第二百三十九条ニ従ヒ故障ヲ為シ又ハ裁判長自カラ回避ノ申立ヲ為シタルトキハ第二百三十九条第二百四十二條ノ第二項ニヨリ會議局ニ於テ之レカ判決ヲ為サヽルヘカラス然ルニ一ハ裁判長ノ判決ニ係リ一ハ裁判長ニ對シタル条件ナリ然ルヲ重罪裁判所定員陪席判事ニ於テ會議局ヲ開キ之ヲ判決スルカ如キハ職權上頗ル穏当ナラサルヲ覺フ抑亦裁判長其會議ニ加ハヽルヘキ者トスルトキハ前キニ判決セシ同一ノ人ニシテ再ヒ之レニ干預シ又ハ自己ノ申立タル事件ヲ躬自カラ判決スルカ如キハ一般裁判法ニ於テ甚タ不穏当ナルヲ

覺フ

回答

第十三條 前條忌避ノ申立ヲ棄却シタルニ因リ故障ヲ為シ若クハ判事自ラ回避ノ申立ヲ為シタル場合ニ於テ會議局ニ於テ判決ヲ為スヤハ忌避セラレ若クハ回避シタル判事ハ仮令裁判長ト雖モ其判決ニ干預スヲ可カラス其他ノ判事ニテ之ヲ判決スルヿ当然ナラン

第十四條 忌避回避ノ申立ヲ認可シタルヤハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事ヲシテ補闕スヘシト雖モ其申立裁判長ニ係リタルヤハ其次席ノ判事ヲシテ之ニ代フヘキカ

回答

第十四條 忌避又ハ回避ノ申立重罪裁判長ニ係ルヤハ控訴裁判所ノ他ノ判事ニ之ヲ命スヘキモノナラン次席ノ判事ニ命スルトノ明文ナキ上ハ必スシモ次席ノ判事ニ限ラサルヘシ

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ為スニハ第二百三十八條ヨリ第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

仙臺裁判所判事　十三年十二月十日請訓
十四年七月廿三日内訓

第二百八十一條

第二百八十一條忌避云々ト有ル所
重罪裁判所ニ在テハ忌避ヲ受ケサル判
事ノミニテ會議局ヲ開キ其故障ヲ判
決スヘキヤ若シ或ハ重罪裁判所ノ判吏
忌避ヲ受ケサル者三名ヨリ少キトキハ之レ
ヲ開キタル地ノ裁判所ノ判吏ヲ加ヘテ會
議局ヲ構成スヘキモノ歟

右ハ忌避ヲ受ケサル判吏ノミニテ會
議局ヲ開クヘシ判事三名ヨリ少キトキハ
其開キタル地ノ裁判所ノ判事ヲ加フ
ヘシ違警罪裁判所判事忌避故障
ハ輕罪裁判所會議局ニ申立ヲ為ス

ヘキ者トス

内訓

第廿八條 第一項ハ見込ノ通第二項ハ
軽罪裁判所會議局ニテ判決ヲ為ス
可シ

松山始審裁判所判事

十五年二月廿日請訓
仝年三月廿日内訓

第二條 重罪裁判所ノ裁判長若クハ
陪席判事ニ對シ忌避ニ就テノ故障
及ヒ其裁判官ノ回避等ハ総テ治罪
法第二百八十一條ノ規則ニ從フヘキハ云
ヲ待タサレヒ其申立ヲ受ケテ之ヲ判
決スヘキ會議局ハ重罪裁判所ヲ開
キタル裁判所ノ會議局ト心得可然
哉

右ハ左ノ通御内訓相成可然哉

内訓

第二条 忌避ニ付テノ故障及ヒ

回避ヲ判決スヘキ會議局ハ其重罪裁判所ニ之ヲ関クヘキ儀ト心得

（三）

右及内訓候也

第二百八十二條　忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取捗ル可シ但五日間弁論ヲ停止シタル時ハ新ニ弁論ヲ為ス可シ

変災厄難ノ為メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條　公判ニ於テ用フ可キ証拠ハ豫審ニ於テ用フ可キ証拠ニ同シ

第二百八十四條　裁判長ハ検察官其他訴訟関係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ検証書類ヲ朗讀セシムルヿヲ得

是等ノ書類ハ原被証人ノ陳述ト同一ノ效ヲ有ス

警視総監 十五年二月九日伺
全年二月十五日付

治罪法第二百八十五条ニ調書ヲ作リタル司法警察官ハ検察官其他訴訟関係人ヨリ証人トシテ之ヲ呼出シ又ハ云々トアリ此訴訟関係人ト被告人モ包含スル儀ニ候哉

第二百八十五條 調書ヲ作リタル司法警察官ハ検察官其他訴訟関係人ヨリ証人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スヿヲ得

右審案スルニ治罪法第二百八十五条ニ謂フ所ノ訴訟関係人中ニハ無論被告人ヲ包含スル儀ト考量スル通御指令相成可然哉

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ検察官其他訴訟関係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書説明ノ為メ之ヲ呼出スヿヲ得

指令

伺之通

若松始裁判所長判 十四年十月廿五日付刑

治罪法第二百八十五条ニ準シ作リ先
司法警察官ハ検察官其他訴訟関係人ニ於
ケル証人ヨリ証人トシテ之ヲ呼出シ又裁
判所ノ聴取ヲ以テ之ヲ呼出スヲ得ト
之ヲ右ハ検察官其他訴訟関係人ヨリ直チニ呼出スヲ得ルモノニ
シテ必ス裁判官ノ允許ヲ要シ而シテ調書ヲ作リ司法
ニ於テ裁判官ニ呼出スヘキモノト
得ルモノトス

同条末項ニ豫審判事ハ裁判所ノ職
権ニ因リ又ハ検察官其他訴訟関係
人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書
説明ノ為メ之ヲ呼出スヲ得ト之アリ

丙第十號明治十五年三月二十二日

大審院
裁判所
警視廳
府縣東京府除ク
治罪法第二百八十五條ニ準シ調書ヲ作リ司法警察官ヲ証人トスル時
ハ書記局ヨリ報知書ヲ以テ出廷セシメ宣誓セシムルニ及ハス書記ノ
席ニ着テ陳述セシム
可シ此旨相達候事

右ハ検察官其他訴訟関係人ニ於
テ其裁判所ノ允許ヲ得テ直チニ之
ヲ呼出スモノニ之ナリ矢張裁判所之
ヲ允許シ裁判所ヨリ之ヲ呼出ス義
ト相心得可然哉

右治罪法第二百八十五条司法警察
官并ニ豫審判事ヲ裁判所ニ出頭
セシムルハ何レモ裁判所ヨリ之ヲ呼
出ス者トス

内訓

司法警察官并ニ豫審判事ヲ裁
判所ニ呼出ス儀ニ付請訓ノ趣右ハ何
レモ裁判所ヨリ呼出スヘキ者トス

司法省

又右司法警察官ハ証人トシテ呼出ス
タル時ト雖モ宣誓ヲ免ス（キノニ之
ナキ儀ト相心得可然哉
右司法警察官等ハ公ノ官員ナル
ヲ以テ無通ノ証人ト同ク宣誓
セシム可キ者ニ非ス

内訓

司法警察官共ニ審判事ニ裁判
所ニ於テ呼出ス儀ニ付請訓趣右ハ何
レモ裁判所ヨリ呼出ス可キ者トス
司法警察官ハ普通ノ証人ト同視ス
可キ者ニ非サルヲ以テ宣誓セシムル
ニ及ハス

警視総監　十五年二月九日付
　　今年分月十五日付

治罪法第二百八十五条ニ調書ヲ作リタ
ル司法警察官ハ検察官其他訴訟関
係人ヨリ証人トシテ之ヲ呼出シ又ハ云々トア
リ此訴訟関係人トハ被告人モ包含スル
哉候哉

右審案スルニ治罪法第一百八十五条ニ謂
フ所ノ訴訟関係人中ニハ無論被告人ヲ
包含スル義ト考量スル因テ左案ノ通御
指令相成可然哉

指令

伺之通

第二百八十六条　豫審ニ於テ訊問シタル証人ハ更ニ之ヲ呼出スヿヲ得

豫審ニ於テ録取シタル証人ノ陳述昏ハ更ニ真証人ヲ呼出サヽル時証人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比較ス可キ時ハ検察官其他訴訟関係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職権ヲ以

ヲ之ヲ朗讀セシムルヿヲ得

高知縣 十四年十一月十七日伺 仝年十二月十四日付

第三條 治罪法第二百七十四條ニ公廷内ノ犯罪ニ付ハ違警罪裁判所ニ於テ軽罪ニ付始審ノ裁判ヲ為スヘシト定メラレタリ本年第四十八号ヲ以テ違警罪裁判ヲ府縣警察署又ハ警察分署ニ委ネラレタル上ハ無論該條ニ拠リ警察署ニ於テ公廷内ノ犯罪ニ係ル軽罪ヲ裁判致シ候義ト相心得可然哉

第二百八十七条 第百七十八条以下ノ規則ハ公判ノ証人ニモ亦之ヲ通用ス

適

右ハ第三條 御指令ノ先例ニ因リ左ノ通指令

第三條 公廷内ノ軽罪ハ裁判スルヲ得ス

司法省

検事ニ告発スヘシ

第四條　警察署ニテ違警罪ハ公判ヲ為ス場合ニ於テ治罪法第二百八十七條及第二百九十七條ニ據リ証人又ハ鑑定人ヲ呼出シタル時之ニ應セサルカ又ハ宣誓ヲ肯ンセス及ニ宣誓シテ陳述ヲ肯ンセサル時ハ第百七十六條第百八十三條第百九十四條ニ定ムル規則ニ遵ヒ直チニ罰金ヲ言渡スヲ得ル義ト相心得可然哉

右第四條ハ警察署ニ於テ違警罪ノ公判ヲ為スニ當リ證人呼出ニ應セサル時ハ治罪法第二百九十三條ニ依リ科料ヲ言渡ス可シ又證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ第百八十二條ニ依リ四罰金ヲ言渡スヲ得スト雖トモ前条ニ立ツル義ト相心得可然哉

第四十八号布告ニテ單ニ違警罪ノ裁判ヲ為スヲ任セラレタルモノニシテ罰金即軽罪ノ裁判ヲ為スヲ任セラレタルモノニ非サレハナリ因テ此場合ニハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又陳述前辯論ニ於テハ検事ニ告発スヘキモノトス鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第二百九十七條ニ依リ第二百九十三條ノ規則ニ従ヒ科料ヲ言渡ス可シ若シ宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル時ハ又前同様罰金ヲ言渡ス

第二百八十八條　證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス

第二百八十八條　證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス

立會ヲ可カラス

ヲ得ス但宣誓ヲ為サシムルト否ト

ハ第四十四号布告ニ依リ便宜取

計ヒ可然

指令

第四條　證人及鑑定人呼出ニ應セサル

件ハ治罪法第二百九十三條ニ依リ科料

ヲ言渡ス可シ證人及ヒ鑑定人宣誓ヲ

肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル場

合ニ於テハ罰金ヲ言渡スヲ得又検事

ニ告発ス可シ但宣誓ヲ為サシムルト否ト

ハ便宜ノ處分ニ任ス

弘前始審裁判所撥事

十五年六月十六日伺電報

仝年仝月二十四日付

治罪法二百八十八條陳述前辯論ニ立

會ヘカラストアルハ百八十四條ノ趣意

ト同一ニシテ陳述前総テ公廷ニ立會ハ

シメサル筈ト心得タルニ目下公判係意

見ヲ異ニシ事件毎ニ上告セサルヲ得

ス差閊多シ直ク電報御指揮ヲ乞

右ハ左ノ通

指令

証人立會ノ儀伺ハ陳述前ハ総テ立會

ハシムルヲ得ス

第二百八十九條　証人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問スヘシ

一　検察官ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

二　民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

三　被告人及ヒ民事擔当人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

司法省

第二百九十条　証人数名アル時ハ氏名目録ノ順序ニ従ヒ之ヲ訊問スヘシ但裁判長ハ証人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聴キ其順序ヲ変更スルヿヲ得

第二百九十一条　証人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルヿヲ得ス

陪席判事及ヒ検察官ハ裁判長ニ告ケ証人及ヒ被告人ヲ訊問スルヿヲ得

訴訟関係人ハ弁論ニ必要ナリトスル条件ヲ分明ナラシムル為メ証人ヲ訊問シ可キヿヲ裁判長ニ求ムルヲ得

司法省

仙臺裁判所判事 十三年十二月十日請訓 十四年七月廿二日内訓

廿九ニ曰 第二百九十二條訴人ノ陳述不實ノ罪ハ第二百六十七條以下公廷内ノ犯罪ニ異ナルヿ無キモノヽ如シ然モ其處置ノ異ナルハ公廷内ノ犯罪ニ非ルモノト看做スヘキヤ

右公廷内ノ犯罪ニ非ラス

内訓

第廿九條公廷内ノ犯罪ニ非ス

第二百九十二条 証人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ検察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引状ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ為ス可シ

其証人ノ陳述ハ昏記之ヲ録取シ豫審判事ニ送

致ス可シ

本条ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ捜察官其他訴訟関係人ノ請求ニ因リ又ハ職権ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スヿヲ得

福岡縣 十四年十一月九日付 十五年二月廿八日付

第十一条 違警罪ノ証人陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタルヿ直チニ豫審判事ニ送付シ可然乎

右ハ左ノ通

第十一条 第二百九十二条ニ証人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル（キ者ト思料シタル時ハ云々豫審判事ニ送致スヿ可キノ言渡ヲ為スヿトアルニ因リ違警罪ノ証人陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者

ト思料シタルトキハ直チニ豫審判事
ニ送付シ妨ケナシ

指令

第十一条　伺ノ通

第二百九十三条　証人
呼出ニ應セサル時ハ裁
判所ニ於テ即時ニ検察
官ノ意見ヲ聴キ左ノ科
料罰金ヲ言渡ス可シ但
其言渡ニ對シテハ故障
及ヒ控訴ヲ許サス
一　遠警罪事件ニ付テハ
五十錢以上一円九十
五錢以下ノ科料
二　軽罪以上ノ事件ニ付
テハ二円以上十円以
下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ
其呼出シタル証人出廷
セスト雖モ科料罰金ヲ
言渡ス可カラス

第二百九十四条　前条
ノ言渡昏ハ即時ニ昏記
ヨリ本人ニ送達ス可シ
其言渡ヲ受ケタル者三
日内ニ出廷スルヿ能ハ
サリシ正当ノ事由ヲ証
明シタル時ハ裁判所ニ
於テ検察官ノ意見ヲ聴
キ科料又ハ罰金ノ言渡
ヲ取消ス可シ但重罪裁
判所開廷ノ後ハ其閉廷
シタル裁判所ニ其申立
ヲ為ス可シ

第二百九十五条　証人呼出ニ應セサル時ハ検察官其他訴訟関係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ為スヿヲ得

検察官自ラ其請求ヲ為サヽル時ハ公判ノ延期ニ付意見ヲ陳述スヿ可シ

第二百九十六条　証人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ検察官ノ意見ヲ聴キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前条ニ従ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヿヲ得但延期シタル時ハ其証人ニ對シ勾引状ヲ発ス可シ

第二百九十七条　第百九十一条以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三条ノ規則ニ從ヒ処分ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ為メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ証人ニ付キ定メタル前数条ノ規則ニ從ヒ処分ス可シ

第二百九十八条　被告人聾者唖者又ハ國語ニ通セサル者十九時ハ第百五十六条第百五十七条ノ規則ニ從フ

第二百九十九条　被告人数名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且検察官其他訴訟関係人ノ意見ヲ聴キ訊問ノ順序ヲ定ムル可シ

裁判長ハ事実発見ノ為メ必要ナリトスル時ハ職権ヲ以テ其順序ヲ変更スルヿヲ得

第三百條　証憑調濟ノ後検察官民事原告人被告人其弁護人及ヒ民事擔当人ハ順次発言スヽ可シ

検察官其他訴訟関係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヿヲ得ス

検察官其他訴訟関係人ハ迭ヒニ弁論ヲ為スヿヲ得但弁論ノ最終ニハ被告人又ハ弁護人ヲシテ発言セシム可シ

宮城上等裁判所檢事

十四年十月廿九日伺
十五年五月九日付

第三十七条　治罪法第三百条証憑調濟ノ後云々トハ公廷ニ於テ被告人及ヒ証人等ニ對シ先ツ証拠徵憑ヲ挙正シ其耿調ヲ為シ而シテ後訴訟関係人ヲシテ順次陳言セシムルモノナル哉果シテ然ラハ第三百五十二条等ノ規則ト矛盾セサル哉

右ハ左ノ通

指令

第三十七条　第三百条公判ノ通則ヲ視メス者ニシテ第三百五十二条ハ軽罪

司法省

公判ノ順序ヲ掲ケタルモノナリ故ニ矛盾スルヿハナキ者トス

（理由）本指令ノ通

第三百一条　検察官公訴ヲ抛棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相当ノ裁判ヲ為スヿ可シ

司法省

第三百二條　弁論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決スヘシ但真判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ為スヲ得ス

同法第一編

松山始審裁判所長判事 十四年十二月一日詰訓 十五年一月十二日内訓

第二條　治罪法第三百三條ノ末項ニテ直チニ控訴又ハ上告ヲ為スヿヲ得トアルハ蓋シ本按ノ裁判言渡ヲ待ヲ要セストノ旨意ナル可シ然レトモ其直チニト云ヘル語ハ異議ノ申立ヲ判決シタル場合ノ即時ニ限レルモノタル乎将タ其判決ヨリ通常ノ上訴期限内ニ其控訴又ハ上告ヲナスヿヲ得可シトノ旨意ニ有之候哉若シ果シテ通常期限ニ従フモノトセハ其期限間ハ本案ノ弁論停止スヘキ筈ニ付追テ上訴セサル場合ト並ヒ五日ヲ経過スルトキハ仝法第二百六十八条第二百八十二条等ノ規則ニ準拠シ新ニ弁論為スヿ可シ其判決ニ對シテハ本按ヘキ乎将タ法律ニ正条ナキヲ以テ仮令幾数十日ヲ経過スルヿヲ為ト否トハ只裁判官ノ便宜ニ従フヘキ義ニ有之候哉

第三百三條　民事擔当人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ関係スル一ヲ得

又民事原告人ハ民事擔当人ヲシテ其訴訟ニ関係セシムル一ヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決スヿヲ可シ其判決ニ對シテハ本按ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ為スヿヲ得此場合ニ於テハ本按ノ弁論

右ハ左ノ通御内訓相成可然哉

内訓

第二条　弁論中ハ上告ヲ為スヲ得ヘシト雖モ其弁論ヲ停止スルハ現ニ上告ヲ為シタル場合ニ限ル可シ五日間弁論ヲ停止シタルトキハ新タニ弁論ヲ為ス可シ

理由　弁論ノ停止五日ヲ経過レハ新タニ弁論ヲ為スノ旨ハ停止時間長キトキハ弁論事件ヲ遺忘スルノ恐アレハナリ然レハ第三百三条ノ場合ニ於テハ此等ノ規則ナシト雖モ五日ヲ過クレハ亦新ニ弁論ヲ為スヘキモノナルヘシ

若松始審裁判所長判事

第二條　新法実施ニ付テハ其附則ノ如キハ不日別論御達可相成儀ト存シ候ヘ共尚喚状収監状等違ノ言渡ハ会議ヲ為スニハ事実及法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證憑ヲ明示ス可シ

第三百四條　裁判所ニ於テ刑ノ言渡

全年十一月六日
全年十二月五日内訓

第三百四條　裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ為スニハ事実及法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證憑ヲ明示ス可シ

局言渡ハ公判言渡ハ等ノ類ハ治罪法ノ規則ニ従ヒ当廳ニ於テ適宜取極メ候儀ト相心得可然哉是又ハ式御達シ可相成哉

右審按候處第二條　治罪法附則ノ儀今状ハ御達相成候儀ヲ以テ已ニ調査相済其他官轄違会議局ノ言渡ハ上訴申立ハ等ノ類ハ総テ治罪法ノ規則ニ従ヒ各裁判所ニテ適

同シ

宜取極メシル儀ト考量候ニ付左之通

内訓

第二条 管轄遠會議局ノ言渡書ノ類ハ治罪法ノ規則ニ從ヒ適宜取計フヘシ

第三條 公判言渡書ハ治罪法第三百四条ニ從ヒ事実及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ検察官ノ請求及ヒ其証憑被告人ノ申立及ヒ其証憑ヲ記載スヘキハ勿論ニ候ヘトモ一應ノ軽罪賭博出火等ノ類ニシテ被告人ニ於テ検事ノ申立ト同シク其罪ヲ犯シタリト自カラ申立其申立ハ被告人真実ノ白状ナリヤト裁判官ニ於テ看認ムル場合ニ於テハ從前ノ振合ニ依リ簡単ナル式ヲ以テ之言渡シ可然哉

右審按候處第三條 公判言渡ノ儀一應ノ軽罪即チ賭博失火ノ類ニシテ被告人ニ於テモ直チニ其罪ニ服スル者ノ如キハ伺ノ通從前ノ振合ニ依リ簡単ナル言渡ヲ為ス時ハ裁判上ニ於テハ便利ナル可シト雖モ從前ノ言渡ハ別段其式ナル者ナキヲ以テ其最モ簡ナル者ニ依ル時ハ裁判ノ不体裁ヲ招クニ至ラン且ツ此言

渡ノミナラス他ノ手続ハ総テ治罪法ニ依リ特リ裁判言渡ノミ旧慣ニ依ルハ飜テ不都合ト考量候ニ付左ノ通

内訓

第三條 公判言渡書ノ儀ハ治罪法ニ従フ可キ儀ト心得ヘシ但検察官ノ請求被告人ノ申立必シモ之ヲ言渡書ニ記載スルニ及ハス

第三百五條 無罪ノ言渡ヲ為スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證憑ナキヿヲ明示スヘシ

仙臺裁判所判事 十三年十二月十日 十四年七月廿三日 内訓 諸訓

第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ為スヘキモノナリ

三十二日 第三百六條私訴ノ裁判言渡ヲ為スヘキモノナリトノミ有リテ民事ノ規則ニ從フトノ明文無シト雖モ当然総則第五條ニ照シ現行民事規則ニ從フヘキモノナルベシ果シテ然ラハ假令ヘハ私訴ノ裁判上身代限リノ言渡ヲ為シ六十日ノ猶示中之レカ配当ヲ訴出ル者アルトキハ刑事ノ裁判官ニ於テ受理擔当スヘキモノカ

ノ裁判言渡ヲ為スヘシ

私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ為スヘシ

右ハ刑事裁判官ニ於テ該件私訴ノ裁判ノ身代限ノ申渡ヲ為スニ臨メリ

其六十日間ノ猶示及ヒ他ノ配当ヲ訴出ル者ノ処分ハ民事裁判官ニ讓ルヘシ

内訓

第三十條　刑事裁判官ハ該件私訴ノ身代限申渡ヲ為スニ止メ其六十日間掲示ノ日及ヒ他ノ配当ノ訴等ハ民事裁判官ノ処分ニ讓ル可シ

若松始審裁判所長判事十四年十二月廿一日請訓十五年一月十二日内訓

第三百七條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職権治罪法第三百七條ニ被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職権ヲ以テ公訴裁判費ヲ以テ公訴裁判費ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當スヘキノ言渡ヲ又ハ幾部ヲ擔当ス可キノ言為スヘシト之アリ右ハ別ニ規則ヲ設ケラレ御渡ヲ為ス可シ

達相成儀トハ存シ候ヘ共餘日モ無之

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費

儀ニ付差向キ花ニ

一裁判費用ハ裁判官ニ於テ被告人ノ犯情資産ヲ按シ言渡スヘキモノニ候哉

用ハ官ニテ之ヲ擔当ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之

一裁判費用ヲ算スルハ検察官起訴以来本案ノ落着ニ至ルマテニ候哉将タ公訴ノ提起即チ被告者ノ起訴以来本案ノ終局ニ至ルマテニ候哉

ヲ擔当ス可シ

丙第二十六號　明治十五年七月七日

大審院

本案ハ第三百七條ニ入ルモ稽留ナラサルヤニ覺エ他ニ可然處ナキ歟

裁判所ハ請
警視廳
府縣（東京府ヲ除ク）
御
治罪法第三百七條第
項公訴裁判費（甲）
官一ニ於テ擔當スヘキ場
ノ金合該金額ハ裁判所
明ニ付ヨリ支出スル儀ト心
得ヘシ此旨相達候
事
則等
但従前ノ指令内訓本文ニ抵觸スル件々ハ取消候事
ノ節
於テ

論告スル儀ト心得可然哉

第四條公廷論告ノ節當職出席ノ位置如何心得可然哉

第六條公判ニ附スル書類ハ判事宛ニスヘキヤ書記局宛ニスル儀ト心得可然哉

右審議スルニ第二條見解ノ通第四條検察官ハ裁判官ノ右側斜ノニ席ニ就クモノトス（理由検察官ノ席次ニ付テハ仙臺裁判所ノ伺ヲ第二局ヘ送付シ意見ヲ同ヒメルニ本文ノ通リナシヲ以テ今再ヒ之ヲ合議セス）第六條公判ニ付スル書類ハ裁判所長ニ宛テ書記局ニ差出スヘキモノトス

右審案スルニ第一項ハ裁判官ノ見込ヲ以テ相當ノ金額ヲ斟スヘク第二項ハ請訓ノ條件分明ナラサルヲ付左ノ通御内訓相成可然哉

内訓

裁判費用ノ儀ニ付請訓ノ趣第一項ニ於テ擔當スヘキ場項ハ裁判官ノ見込ヲ以テ相當ノ金額ヲ斟スヘキ場合該金額ハ裁判所ヨリ支出スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

但従前ノ指令内訓本文ニ抵觸スル件々ハ取消候事

裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

治罪法第三百七條第甲項公訴裁判費官

福嶋裁判所検事（十四年十一月廿五日請訓 十五年一月十三日内訓）

第二條 證券印紙税酒類税犯則等ノ如キ諸罰則ヲ犯シタル者モ公判ノ節ハ通常犯罪者公判通リ訟廷ニ於テ論告スル儀ト心得可然哉

第四條公廷論告ノ節當職出席ノ位置如何心得可然哉

第六條公判ニ附スル書類ハ判事宛ニスヘキヤ書記局宛ニスル儀ト心得可然哉

右審按スルニ第二條見解ノ通第四條検察官ハ裁判官ノ右側斜ノ席ニ就ク（理由検察官ノ席次ニ付テハ仙臺裁判所ノ伺ヲ第二局ヘ送付シ意見ヲ向ヒタルニ本文ノ通リナリヲ以テ今再ヒ之ヲ合議セス）第六條公判ニ付スル書類ハ裁判所長ニ宛テ書記局ニ差出スヘキモノトス

第二條同ノ通第四條裁判官ノ右側
斜ヲニ著席スヘシ第六條裁判所長
ニ宛テ書記局ニ差出スヘシ
三重縣 十四年十二月廿七日同十五年一月十三日付
治罪法第三百九條ニ本案ノ裁判言渡
ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時
ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止スト之
レアリ而シテ其裁判言渡ヲ受ケタル者ヲ
上訴ノ期限内又ハ上訴アリタル時ハ其
判決アルマテノ間獄舍ニ勾置スル等ノ明
文之レナシ若シ其裁判言渡ヲ受ケタル
者公判以前勾留又ハ収監若クハ責

付トナリタル者ナル時ハ裁判停止中何レノ
場所ニ差置クヘキ哉ニ候哉
右審案スルニ治罪法第三百九條ノ場
合ニ於テ裁判言渡ヲ受タル者公判以前
拘留若クハ収監セラレタル者ナル片ハ
上訴ノ期限内又ハ上訴アリタル片其判
決アルマテ其裁判執行停止中ハ仍ホ
監舍ニ拘禁スヘク若シ責付セラレタル
者禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ナル片
ハ治罪法第三百六十四條第二項被
告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ
當然保釋責付ヲ取消シタル者トスト
アルニ依リ亦仍ホ監舍ニ差置クヘキ儀

ト考量ス因テ左ノ通御指令相成可
然哉

指令

伺ノ趣拘留又ハ収監セラレタル者ハ
其係監倉ニ留置キ責付セラレタル者
モ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル件ハ亦監
倉ニ留置ノ儀ト心得可シ

福井縣十五年一月九日伺
全年全月十四日付電報

遠警罪犯裁判ニ付証人及ビ鑑定人等ノ旅費日
当刑法附則第四章第四十八条以下ノ条ニ準拠
シ償金言渡可然哉但無力ニシテ償フ能ハサル
トキハ資力限追徴シ可然哉

右ハ左ノ通

指令

本月九日電報伺証人鑑定人ノ旅費等ハ伺ノ
通但無資力ノモノハ裁判所ニ於テ民事ノ規
則ニ従ヒ身代限ノ処分ヲ為ス

仙臺始審裁判所判事

十九年一月十二日伺合
十九年一月十八日回答電報

第一項　豫審ヲ経サル公判被告呼出シハ拘留
人ヨリモ矢張リ呼出状ヲ発シ二日ノ猶豫ヲ
與フルヤ

右ハ左ノ通

回答

第一項　呼出状ヲ発スヘシ

第二條　豫審ヲ経ス直チニ軽罪公判ヲ求ム
ル際証人アレハ検事ヨリ同時ニ呼出方ノ請求

ラキルヤ

右ハ左ノ通

回答

第二項御見込ノ通

第三項宣誓ヲ肯セサル者モ矢張リ証人ト名ツケラルヽヤ

右ハ左ノ通

回答

第三項御見込ノ通

宇和嶋始審裁判所判事（十四年十二月五日伺 十五年二月十五日付）

第八條 治罪法第三百七条第三項ニ私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ従ヒ敗訴シタル者之ヲ擔当ス可シト之レアリ右民事規則ニ従フトハ現今ノ訴訟入費規則ニ従ヒ其旅費日当其他昏類認ノ料等ヲ敗訴シタル者ニ擔当セシムル儀ニ候哉又ハ別段法律御設ケ相成儀ニ候哉

右ハ左ノ通

指令

第八條 前段伺之通

仙臺裁判所検事（十四年十一月廿一日付 十五年十二月廿三日付）

第二條 刑事裁判所ノ裁判言渡シニ對シ訴訟関係人ヨリ控訴又ハ上告ヲ為ス者アル時ハ原裁判所ニ於テ其訴訟費用ノ金額ヲ算定シテ是ヲ豫納セシムベシ云々本年第四十五号公布ノ趣ハ既

ニ裁判ヲ受タル原裁判所ノ訴訟費用
豫納セシムルノ謂ニシテ將ニ起サントスル控
訴又ハ上告ニ関スル費用ヲ算定豫納ス
ル事ニハ無之義ニ心得可然哉
右ハ審按スルニ第二條本年第四十五
号公布ニ刑事裁判所言渡ニ對シ
訴訟関係人ヨリ控訴又ハ上告ヲ為
ス者アル時ハ原裁判所ニ於テ其訴
訟費用ノ金額ヲ算定シテ之ヲ豫
納セシムルトアリ其訴訟費用トハ
ル控訴上告ノ費用ヲ謂フモノニ
シテ原裁判所ノ訴訟費用ヲ謂
フヌノニアラスト考量候ニ付左ノ通

リ

指令

第二条　本年第四十五号公布中其
裁判費用トアルハ控訴又ハ上告ニ関スル
費用ヲ算定豫納セシムル儀ト心得ベ
シ

雇路始審裁判所長判事（十四年十二月二日請訓 仝年仝月廿日内訓）

第六条　免許無罪者ハ訴裁判費用官
ニテ下付スヘキ金員ハ定額金ヲ以テ立替
置キ追テ本省ヘ下付ヲ乞ヒ（キモノカ）
或ハ豫テ御下ケ渡シ置カルヽモノ歟

内訓

第六条　明治九年第六十三号布告ニ

依リ當然裁判所ノ擔當ニ帰スヘキ費
用ハ訴訟費定額金ノ内ヲ以テ支弁スヘキ
モノトス
理由別紙參照甲号ノ通太政官ノ裁
令ニ依レハ明治九年第六十三号布告
第項ハ新法施行ニ至ルモ猶存在ス
（キヲ付本議ノ通）
第七条 被告人証人ヲ呼出サントスルトキ
其費用ヲ豫納スル能ハサルヲ以テ官ニ
於テ立替置ク金員モ亦前条ノ通心
得可然哉
内訓
第七条追テ内訓ニ及フヘシ

理由別紙參照乙号ノ通本年第
四十五号布告第三項ハ削除ノ議
御申奏中ニ付追テ御内訓相成
可然
第八条 訴訟関係人控訴上告ヲ為
サントスルトキ其訴訟費用ノ金額ヲ算
定スルハ仮令ハ被告人勾留ヲ受ケタル
トキハ控訴裁判所ノ監倉ハ殺シ又訴
訟ニ関スル一切ノ書類ヲ同所書記
局ヘ送付スル費用等ヲ豫納セシムル
迄ニシテ控訴受理セシ上ノ費用ハ原
裁判所ノ管掌スルモノニ無之哉
内訓

第八条 控訴若クハ上告ニ付テ要スル所ノ本年第六十七号布告第四十八条ニ記載シタル費用ヲ豫納セシムヘシ

滋賀縣 十四年十二月十日付 同年十月廿八日付

第七条 警察署ヨリ違警罪ノ被告人又ハ其証人ヲ喚出スノ費用及ヒ日當等ハ被告人ヨリ徴収シ若シ被告人資力ナキ又ハ無罪トナル場合ニ於テハ警察費ヨリ支出スヘキ義ニ候哉

右ハ左ノ通

指令

第七条 刑法第四十五条治罪法第三百七条ノ通但被告人資力ナキトキハ資産ヲ持直スヲ待テ之ヲ徴収ス官ニテ擔當スヘキトキニ當リ警察費ヨリ支出スルヤ否ノ處ハ當省ノ主管ニ非サルヲ以テ指令ニ及ハス

福島縣 十四年十二月七日付 同年十月廿六日付

本年第四十五号ヲ以テ証人呼出費用等之義布告相成候ニ付其第二項三項ハ違警罪事件ニ適用スルハ勿論ノ義ト存候得共治罪法第百七十条ノ如キ制限ナキヲ以テ其人員ヲ限ラサル義ニ可有之哉

右公布未塡ノ場合ニ於テ被告人到底

償還ノ資力ナキ片ハ警察署ニ於テ立替タル金員ハ御省ヨリ御下附勿論ニ候哉

指令

違警罪ニ呼出ス可キ証人ニ付テハ治罪法第百七十条ノ如キ制限ナシト雖モ其呼出費用ヲ立替置クハ軽罪ニ付呼出スヘキ証人ノ制限ニ超過スヘカラス但シ本年第四十四号公布ニ依リ便宜取計ヒ被告人ヨリ相對ヲ以テ其費用ヲ弁セシムルモ苦シカラサル義ト心得ヘシ

警察署又ハ分署ニ於テ立替タル金員ハ當省ヨリ下附スルノ限リニアラサル

義ト心得ヘシ

違警罪事件ニ付被告人白状ナキ場合ニ於テ主任ノ見込ヲ以テ呼出シタル証人監定ノ旅費日當及ヒ被告人証人監定人呼出ニ付テノ郵便并脚夫賃我ハ是亦御省ヨリ御下附勿論ニ候哉

指令

治罪法第三百七条第一項第二項ノ通但シ警察署又ハ分署ニ於テ違警罪ヲ裁判シタル片官ニテ擔當スヘキ裁判費用ハ當省ヨリ下付スルノ限リニアラサル義ト心得ヘシ

宇和島始審裁判所判事外二名 十五年十一月九日伺 十五年二月六日付

第一条　本年第四十五号布告中刑事裁判所ノ裁判言渡ニ對シ訴訟関係人ヨリ控訴又ハ上告ヲ為ス者アルトキハ原裁判所ニ於テ其訴訟費用ノ金額ヲ等定シテ之ヲ豫納セシムヘシト有之候処右ハ原裁判所ヨリ其上訴ヲ受クヘキ裁判所ヘ訴訟ニ関スル書類ヲ送達スル費用ノミヲ指示セラレタル者ナルカ將其事件ニ関スル各証人監定人ノ呼出費用及ヒ被告人ヲ控訴受クヘキ裁判所ヘ送致セシムル巡査ノ旅費日當等迄包含シタル者ニ有之候哉又ハ右費用ノ金額ヲ等定スルハ如何ノ方法ヲ以テ等定致スヘキ義ニ候哉

第二条　同布告末項中ニ若シ被告人旅費ヲ當ヲ豫納スルノ資力ナキトキハ治罪法第百七十条ノ制限ニ從ヒ裁判所ニ於テ其費用ヲ立替置ヘシト有之然ルニ若シ其立替置タル被告人刑ノ言渡ヲ受ケ到底其費用ヲ弁償スヘキ資力ナキトキハ其立替置タル費用ハ裁判所ノ損失ト相心得可然哉

第三条　地方裁判所ニ於テ本年末ニ到リ刑ノ言渡受ケタル被告人未ル十五年一月ニ及ヒ上告致シタルトキハ大審院ヘ送付スヘキ書類ノ費用モ豫納セシメ若シ

豫納スルヿ能ハサル時ハ上告ヲ為スヲ得サル義ニ候哉又ハ本年中ノ処断ニ係ルヲ以テ旧例ノ通取扱可然哉

右ハ左ノ通

指令

第一条第二条第三条 追テ何分ノ達アル可シ

理由 昨年第四十五号布告訴訟費用ノ件ハ廃止ノ義上申中ニ付暫ク本指令ニ及ヒ置カレントス、

松山始審裁判所検事

十五年二月十五日付
仝年三月三日付

第一条 刑法第四十五条及ヒ治罪法第三百七条ニ照シ刑ノ言渡ト俱ニ公訴裁判費用ノ宣告ヲ為シ其言渡確定シタル件ハ書記治罪法第四百六十二条第二項并客年丁第廿五号御達ニ依リ徴収スヘシト雖モ若シ其費用ヲ納完スル能ハサル旨ヲ申立ル者アル中ハ通常民事ノ規則ニ従ヒ処分スル義ニ候哉

右審案スルニ第一条伺其當ヲ得候ト考量スル因テ左ノ通

指令

第一条 伺ノ通

第二条 前条民事ノ規則ニ依ル（キモノトセハ書記ハ其納完スル能ハサル旨ノ書面ヲ徴シタレヲ検察官ニ付シ検察官ハ通常公文ヲ以テ其金額ノ多寡ニ因リ管轄治安若シクハ始審裁判所長ニ移牒スル義ト心得可然哉

右審案スルニ第二条仍其當ヲ得候ト考量ス因テ左ノ通

指令

第二条 伺ノ通

第三条 罰金科料納完ノ期限ハ刑法第廿七条及ヒ第三十条ニ明文有之ト雖モ公訴裁判費用ニハ納完ノ期限不相見右ハ民事出訴期限ノ規則ニ従ヒ若シ延期ヲ請フモノアレハ聽許スル義ニ候哉果シテ然ラハ右出訴期限規則中第四条ニ準スヘキ哉

右審案スルニ第三条刑事裁判費用ハ納完ノ期限ナキヲ以テ其延期ヲ請フ者アレハ聽許スルヲ得ヘシト雖モ出訴期限規則第四条ニ照準スヘキモノニ非スト考量ス因

テ左ノ通

指令

第三条 刑事裁判費用ハ納完ノ期限ナキヲ以テ其無資力ノ者ハ直ニ身代限ノ処分ヲ為スヘシト雖モ時宜ニ依リ其資力ノ生スル迄猶豫スルヲ得ル義ト心得ヘシ

兵庫縣 十五年一月廿五日付 仝年二月廿八日付

第十二条 違警罪ノ裁判費用ヲ官ニ於テ擔當スル場合ハ警察費ヨリ支弁スヘキ筋ニ候哉又ハ御省ヨリ下付相成ルヘキ筋ニ候哉

右審案スルニ左ノ通

指令

第十二条 當省ヨリ下付スルノ限ニアラス

第十三条 違警罪ノ裁判費用ハ刑法第四十五条治罪法第三百七条ニ依リ被告人ニ擔當スヘキノ言渡ヲ為シタルトキ被告人ノ納完ヲ肯セサルトキハ身

代限迫ノ處分ヲ為ス（キモノヽ如シ而
シテ警察署ニ於テハ身代限ノ処分
ヲ為スヲ得サル（シ果シテ然ラハ此場
合ニ於テハ其金額ノ多寡ニ從ヒ治
安裁判所又ハ始審裁判所（其処分
ヲ要求ス（キ義ト相心得可然哉
但其要求ハ尋常民事訴訟ノ手続
ニ依ラス照會ニテ可然候哉

右審案スルニ左ノ通

指令

第十三条　伺ノ通但書ノ趣通常
民事ノ手続ニ從フ（シ

第十四条　被告人又ハ相続人裁判費用ヲ納メサル前ニ於テ犯人身死スル件裁判費用ヲ納完スル能
ハサル旨申立タル時ハ身代限ノ処分
ヲ為ス（キモノナルヤ又ハ資力有無ノ取
調方ヲ原籍戸長ニ照會シ果シテ無
資力ナル件ハ必シモ身代限ノ処分ヲ
要セサル義ニ候哉

右審案スルニ左ノ通

指令

第十四条　身代限ノ処分ヲ為スヲ可シ
但検察官ニ於テ身代限ニ処スルモ犯
人無資力ニシテ到底無用ノ手数ニ渉
ルト見込ムヲキハ資力ノ生スル迄其処分
ヲ猶豫スルヿヲ得

第十五条 前条必シモ身代限ノ処分ヲ要スルモノトセハ其処分ニ止ムヘキモノナルヤ将タ本人又ハ相続人身代持直シ次第仍ホ徴収スヘキモノニ有之候哉

右審案スルニ左ノ通

指令

第十五条 身代限ノ処分ニ及ヒタル件ハ本人又ハ相続人身代持直シ次第徴収スヘシ

第十六条 被告人又ハ相続人無資力ナル件裁判費用ハ官ノ損失ニ帰スヘキハ勿論ノ義ニ候哉

右審案スルニ左ノ通

指令

第十六条 伺ノ通

高知縣　十五年一月廿五日伺
　　今年二月廿八日付

第四条　刑法第四十五条ニ刑事ノ裁判費用ハ其全部又ハ幾分ヲ犯人ニ科スト
アリテ刑法附則第四十八条ニ其制限ヲ
定メラレタリ右ハ違警罪ヲ審判スルノ
場合ニ於テモ検察官ノ求メニ依リ又ハ
裁判官ノ職権ニ依リ呼出シタル証人
等費用タルト被告人ノ求メニ依リ呼出
シタル証人等ノ費用タルトニ拘ラス一
切主任警部ノ見込ニ依リ直チニ右費
用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當スヘキ旨ヲ言
渡シ可然哉

右ハ左ノ通

司法省

指令

第四条 伺ノ通

栃木縣 十五年二月三日伺 全年三月十四日付

第七条 治罪法第三百七条第二項ニ免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當スヘシトアリ就テハ違警罪ニ付免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ其裁判費用ハ無論地方税ヲ以テ支弁スヘキ義ニ可有之果シテ然ラハ違警罪ニ付被告人ヨリ徴收シタル裁判費用ハ地方税ニ引繼可然哉

右ハ左ノ通

指令

第七条 裁判費用タルモノハ訴人醫

師鑑定等ノ請求ニ依テ被告人ヨリ
徴収シ該請求者（下付スキモノナシ
ニ付伺面ノ如キ地方税ニ引継ヲナス
等ノ金額ヲ生スル義ハ無之筈ニ候
事

中村始審裁判所撿事

十五年三月十七日　請訓
仝年四月十二日　内訓

第一條　刑法第四十五條ニ付刑事ノ裁判費用ハ其全部又ハ幾分ヲ犯人ニ科スト
アルニ其刑ヲ受タル者ノ貧富ニ應シテ科スベキモノト解釋シテ可ナルヤ果シテ其
貧富ニ應シ科スベキモノトスルトキハ裁判言渡前ニアリテ假令數日ヲ費スモ必ス資
力ノ有無ヲ取調ヘサルベカラス又該條ハ貧富ニ應シ科スベキモノニアラズトシ其裁
判費用ノ全部又ハ幾分ヲ裁判官ノ見込ニテ犯人ニ科スベキモノトスルトキハ資力ノ有
無ニ関セス相當ノ言渡ヲ為スヲ得ヘシ然ハ

則之ヲ徴収セシニ萬一資力ノ乏キ者ニ係ラハ刑法付則第五十三條ニ云々犯人身死スル時ハ其相續人ヨリ之ヲ徴収ストアルニ依リ其相續人尚義務ヲ継續負擔スベキ責メアルモノナレハ無論民事身代限迫ニ及フ理義ト解釈シ可然哉將タ資力限リニ止メ可然哉

右ハ左ノ通

内訓

第一條　裁判費用中幾分ヲ科ストハ法律上ニ於テ被告人ニ負擔セシム可ラサル費用ヲ生セシ場合ヲ示シタル者ナルヲ以テ貧富ニ應シ科スベキ限ニアラザル事

但シ民事身代限リノ處分ニ及ブ可シ

宮城上等裁判所檢事

十四年十月廿九日伺
十五年五月九日付

第三十八条　治罪法第三百七條公訴裁判費用ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ為シタル場合被告人賠償スヘキノ資力ナク又ハ最初ヨリ資力ヲ有セサル者アル片ハ如何処分ス可キ哉

右ハ左ノ通指令

第三十八条　身代限ノ所分ヲ為スヘシ但資力ノ生スル迄適宜其處分ヲ猶豫スルヿヲ得

（理由）先例ニ因ル

第三百八條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス没收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲スヲ可シ

丙第廿四號　明治十五年六月二十六日

大審院

裁判所

警視廳

府縣（東京府ヲ除ク）
東京憲兵本部
犯罪ノ用ニ供シ又ハ犯罪ニ因リ得タル物件ハ轉輾シテ他人ノ手ニ在リ及ヒ没収スヘキモノ若クハ證憑ノ爲メ官ニ保存シ置クヲ必要トスルモノヲ除クノ外ハ裁判官檢察官司法警察官ニ於テ實際ノ便宜ニ因リ裁判言渡アルマテ其所有主ヘ假ニ之ヲ下渡シ置クヲ得ヘシ此旨爲心得相達候

（十四年二月廿二日付
十五年三月十五日付）

長崎上等裁判所検事

第二十一条　第三百八条物品所有主ヘ假ニ之ヲ下渡シ（引渡方ノ義ハ書記ニテ取扱且又被告人逮捕ノ節犯罪ニ関係セサル所持品有之時ハ勾留所ニ於テ預リ置検察官関係セサル義ト可心得乎

右ハ左ノ通

指令

第二十一条　第三百八条ノ没収ニ係ラサル差押物品ヲ所有主ニ還付スルノ言渡ハ検事ノ執行スルモノトス被告人逮捕ノ時犯罪ニ関係セサル所持

品ハ客年第八十一号御達監獄則第
十四条ニ依リ処分スル義ト心得ヘシ

兵庫縣 十五年一月廿五日伺 全年二月廿八日付

第十七条 治罪法第三百八条ニ被告
人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス
没収ニ係ラサル差押物品ハ所有主
ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡
ヲ為スヘシトアリ右ハ私訴ノ裁判ニ非サ
ルヲ以テ警察署分署ニ於テ為スヘ
キ違警罪ノ裁判ニモ適用スルハ論ヲ
俟タサルヘシ果シテ然ラハ其差押物品
ハ當初何人ノ手ヨリ差押ヘタルト否ト
ニ論ナク所有主ニ還付スヘキハ勿論ニ
候処其所有権ニ付異議アルモノヽ如
キハ民事裁判ヲ経サレハ判明セサルモ

ノニ付右等ノ物品ハ當初差押ヘタル者
ニ還付致候義ト相心得可然候哉

右審案スルニ左ノ通

指令

第十七条　伺ノ通

大津始審裁判所掛事　十五年五月廿五日伺　左年六月七日付

治罪法第三百八條ノ場合ニ於テ没収ニ係
ラサル差押物品ヲ所有主ニ還付スルノ言
渡ハ私訴裁判ニアラサルモ粗類似ノ者ニ
可有之然レハ此物品ニ付取調未タ充分
ナラサル片ハ格別ナリト雖既ニ所有主モ
判然致シ他ニ取調ヲ要セサル者ハ則チ公
訴ノ裁判ト同時ニ所有主ヲ呼出シ還
付ノ言渡ヲナスヘキノ精神ニシテ譬ヘハ
盗賍被告人ノ手ニ現在セシヲ以テ差押タル
時ノ如キ処刑言渡ノ日直チニ被害者ニ還
付スルノ類ニ無之哉若シ然ラストセハ總テ
裁判官ノ便宜ニ任セ所有主不分明ナルニア